

鳩木節子の後日
甘木数彦

第三章

—

どんなに暑い夏の午後でも、古希堂の店内は薄暗く涼しかった。非番の節子は壁に立て掛けてあった年代物の折りたたみイスに腰掛け、忠晴の話し相手をしていた。骨董品の倉庫になっている空き部屋から壺だの鎧だのを運ぶ手伝いを頼まれ、そのまま部屋に戻るタイミングを逃してしまったのだ。フライングエイプで香奈が噂の変異を阻止してから、数日が過ぎていた。

化け猫の噂から骨董業界の裏話、いいかげんマンションを改修したいという話や今年の夏がどうしてこんなに暑いのかということまで、忠晴はじつによく喋った。それに対して節子は時々あいづちを打ったり、意味のない質問を挟んだりするだけだった。

話題は忠晴の「昨日久し振りに伊助と会った」という一言から、伊助自身のことへ及んだ。

「節子ちゃんは伊助がどうして戦うようになったのか、知ってるかね？」

節子はうなずく。

伊助はもともと、冷凍食品メーカーの研究部門で働いていた。ところがある日、組織によって妻と子供を殺され、自分は改造人間にされてしまう。節子と同じく脳をいじられる前にどうにか脱出した伊助は、復讐のために組織と戦うようになった。

「伊助も戦っていた頃は、ああじゃなかった。復讐心と正義の怒りに燃える男だった」

節子は「はあ」と曖昧に返事をした。そんなヤル気に満ちた伊助など想像もできなかった。忠晴はグラスの麦茶をひとくち飲むと、続けた。

「ところが、組織を殲滅したあたりからおかしくなった。最初は新しい目標を見付けようとあれこれしていたんだが、どうもだめだったらしい。だんだん無気力になって、暮らしに困らないせいもあって、部屋から出なくなってしまった。張り合いを失ってしまったんだな」

それは節子も知っている伊助だった。

「とうとう自殺しようとした」

それは初耳だったが、驚くことではなかった。目的を失い、日常生活を表面的に維持しているだけの自分を省みれば、それは当然な成り行きだと思えた。その発想からすれば自分もいずれ自殺を試みることになりそうだが、いまひとつ実感が湧かない。

「毒は効かない。大抵の損傷はすぐに回復する。そこであいつは製鉄所に忍び込んでな、溶鉱炉に身を投げたんだ。ところがそれでも死にきれなかった。作業員が発見したときは全身の組織がほぼ炭化して、なんだかよく判らない黒いカタマリになっていたそうさ」そこで忠晴は言葉を切る。節子は伊助が味わった痛みを理解しようとして、やめた。一瞬で意識など消え飛んでしまっただろう。

節子の考えを見透かしたかのように、忠晴は首を左右に振った。

「悲惨なのはな、溶鉱炉に飛び込んでから体が回復するまで、あいつは想像を絶するような苦痛に苛まれ続けていたということだ。もともと戦闘用の肉体だ。そんな苦痛を味わい

ながら発狂することも、失神することもできなかったんだ。それ以来あいつは死ぬことも諦めた。また死にきれなずに苦痛を味わうことがが恐ろしいんだな。そうなるともう、本当にすることがない」

節子はまた気の抜けた返事をした。それにしても、話を聞く限りでは節子以上の回復力だ。「つまりだな」忠晴はなおも続ける。話が終わったと見せかけて続くのが忠晴の話し方だった。「あいつはもう寿命が尽きるのを待ちながら生きているだけだ。その寿命だってそうそう尽きない。伊助はものすごくゆっくりとしか歳を取らないからな。私が初めて会ったときから、あいつは四〇歳くらいのままだ。限りなく不老不死に近い。これは節子ちゃんにも言えることか」

節子は引っ越し直前に伊助から聞いた話を思い出した。伊助はそのとき忠晴について「初めて会ったときからじいさんだった」と語っていたのだ。

そのときは適当なことを言っていると思っていたのだが、伊助の話からすると意外に本当かもしれない。二人が初めて知り合ったのが伊助の現役時代なら、遅めに見積もっても節子が生まれるよりずっと前のはずだからだ。

そもそも節子は忠晴について骨董屋兼大家だということ以外、ほとんど何も知らない。忠晴が数代前の組織を滅ぼした人物だとしても不思議ではないのだ。

「にしても、せっかくの頑強な体と潤沢な寿命を捨てようとするなんて。理解できん。なぜそれを活かそうとしないのか。死ぬ気遣いさえなければ、どんなことにでも挑戦できる。他人の何倍ものことだって成し遂げられるというのに」

伊助に同情する気はまったくないらしい。むしろその口調からは普段の親しみやすさが消え、愚か者を見下すような響きさえあった。いくら忠晴が高齢で伊助や節子ほど寿命が残っていないにしても、そこにはただの妬みだけではわりきれない違和感が存在した。

「節子ちゃん。きみは伊助や汽一郎のようになっちゃだめだぞ」
なぜそこで汽一郎の名が出てくるのか不明だったが、節子は軽くうなずいた。

そんなことを考えていると汽一郎が入ってきた。汽一郎は忠晴と、その傍らに座っている節子へ目を留めた。

「たまには大家らしい仕事をしたらどうだ？ 俺はこうやって開店前にも働いてるんだぞこのクソ暑い中。それなのにあんたはどうだ。ひ孫くらいの女の子相手にガラガラと」

「嫌ならやめてもいいんだぞ。どうだ、いっそ引っ越したら？」

「そうされて困るのはそっちだろ。ここのヤツで他に誰が管理人をやるっていうんだ？ それとも外部の人間でも雇うか？ それとも自分でやったらどうだ。脚立の上で電気を換えたり、ベランダから身を乗り出して空になったツバメの巣を取り除いたり」

いったいどんな事情があるのか、忠晴は言い返さなかった。汽一郎は節子に向かって、申し訳なさそうな顔をした。

「驚かせちゃったよな。すまない。別に喧嘩してるわけじゃないんだ。なんて言うか、そう、気の置けない間柄ってやつで」

あきらかに親友同士の憎まれ口とは言えない雰囲気だったが、節子は納得したフリをした。「そうそう。二人とも根は口が悪いから、どうもはたで見ていると喧嘩しているように映るらしいんだな」

どういうわけか忠晴も話を合わせる。

「で、なにか用なんだろ」

忠晴は汽一郎の方を見ずに尋ねる。

「ああ。五階の廊下の電気を換えといたぞ」

「まだ換えてなかったのか。何日前に頼んだと思ってる」

「こっちだって忙しいんだ。不満があるなら自分でやれ。じゃ、節子ちゃん。またな」

そう言うと汽一郎は白昼へ出て行った。

忠晴のところを後にした節子は伊助の部屋を訪れた。自殺しようとした、という話が頭に残っていたせいもあるが、なんとなく会いたかったというのが大きい。

いつものように居間でケーブルテレビを観ていた伊助に、節子は汽一郎と忠晴の遣り取りを語って聞かせた。

「それでなにか？」

話が終わると伊助は言った。ここでうっかり「特に何も」などと答えれば、すぐに追い返されてしまう。

「あの二人って、やっぱり仲悪いんですよね？」

「そうだな」

「どうしてなんですか？」

伊助はすぐには返事をしなかった。「知らない」「合わないんだろ」などと言えば済むはずなのに。伊助は基本的に最小限しか嘘をつかないのだ。嘘は維持するのが面倒だし、嘘だとバレたときに釈明するのも面倒なのだ。

「知らないわけではないけれど、俺なんか勝手に喋っていいものかなあ」

いつものように道義を重んじるフリをして、伊助は話を打ち切ろうとする。

「なにか問題でも？」

節子は食い下がる。

「勝手に喋ったって知れたら、いい顔はされないだろうな。それに、係わると面倒なことになるよ」

面倒になる。その言葉はいまの節子にとって、なかなか効果的な脅し文句だった。

「じゃあ、当たり障りのないところだけ。汽一郎さん、自分の代わりに管理人なんて雇えないって思ってるみたいですけど、どうしてなんですか？」

伊助は露骨に嫌そうな顔をする。

「それはけっこう核心だよ」

「じゃあ、汽一郎さんってどうしてここの管理人になったんですか？」

「ああ、それね。もともと汽一郎くんは孤児でさ。でまあ今の二人からは信じられないだろうけど、忠晴さんは幼い汽一郎くんを引き取って育てたんだ。養子にはしなかったけどね。言ってみれば二人は親子みたいなもんだ。そして息子と男親ってのはソリが合わないことも多い」

話していて殺された娘のことを思い出したのか、伊助はほんの少しだけ寂しそうな表情を見せた。普段は素直に感情を出さないだけに、節子はそんな伊助をすぐに抱きしめ、慰めたくてたまらなくなってきた。手を握りしめてその衝動を抑えつける。

忠晴と汽一郎が親子だということに対しては、特に驚きはなかった。じっくりくるわけ

でもないが、信じられないというほどでもない。

「でも、今まで誰もそんなこと」

「あの二人は仲が悪いからね。話すような機会がなければわざわざ言うほどのことでもないし。それにしても節子はあれだ。姉さんのことといい、ここに来てから前以上に面倒臭いことを持ち込んでくるね」

「そうですか？」

「そりゃそうだよ。生活に密着した人間関係ってのは、組織なんかよりずっとややこしいことになりかねない。ともかくあの二人が自分たちのことに他人を巻き込むことはないはずだから、お前があれこれ心配することじゃない」

そこまでだった。節子は名残惜しさを感じつつも、伊助の部屋を出た。

その日の晩、いつものように仕事帰りの香奈は節子の部屋へやって来た。どういうわけか最近、非番の日は節子が香奈のぶんも夕食を作るようになっていたのだ。

おかげで簡素な節子の部屋は、台所用品や調味料ばかりが充実するようになっていた。今日のメニューは鶏のホイル焼きと中華風スープにサラダだった。

「なんかいいことでもあった？」

ホイルを開きながら、香奈が尋ねる。

「いえ、別に。どうしてです？」

「なんかいつもより明るいみたい」

「そんなことないですって。いつもどおりですよ」

香奈は疑いの目を節子に向けると、缶ビールをあおった。ノドがせわしく波打つ。

「じゃあ、今日あったことを報告しなさい」

そんな義務はないのに、香奈の命令には不思議と逆らえない強制力があつた。節子は忠晴や汽一郎のこと、伊助のことを語った。

「前から気になってたんだけど、なんで伊助のことかまうの？」

「なんでって？」

「そもそもさ。忠晴さんと汽一郎のことなんか、私に聞いたほうが判りそうなものでしょ？」

あの二人も私もこの地元民なんだから」

「まあ、そうですね」

「じゃ、なんで？ あいつの所に行って面白いことがあるわけじゃなし」

節子は返答に困ってしまった。特に理論的な理由はないのだ。そんな節子を眺めつつ、香奈は缶ビールを飲み干し、新しい缶を開ける。

「あのさ。うすうす思ってたんだけど、あんた伊助のことが好きなんですよ」

上半身が伸びたかのように、香奈はテーブルへ身を乗り出す。

「そんなことはないです。いやその、尊敬はしてますし、力になってくれたわけだから、そういう意味では大事に思ってますけど」

しかたなく、節子は思いつきで喋る。

「それじゃどうして伊助のことかまうかの答えになってない」

「えーと。伊助さんの改造人間としての悩みや苦しみてあるじゃないですか。それを分かち合えるのって、私だけだと思うんです。伊助さんが今みたいになっちゃったことも、

自分のことみたいにすごくよく解るんです。だから　　そう、少しでも人と触れ合う機会を持ってくれればって」

話ながら、だんだん自分でも自分の思考が追えなくなってくる。内容のつじつまが合っているのかもおぼつかない。

「ふーん。ま、思春期のあいだに親しい男って言えばあいつくらいだったろうしね。共に一つの目標に向かって戦ったんだし。さぞ頼れるようにも見えたでしょ。それで、刷り込まれちゃったわけだ」

節子は足先から何か流れ出し、体組織の密度がふつうの人間並みに低下するような感覚を味わった。

ただでさえ香奈は自分の直観を確信する人間だ。それが酔っぱらっているともなれば、節子程度ではどう反論しても無駄なのだ。それにしても、これほど見事に自分の言い分を無視されるとは予想していなかった。

「ピーナツでも煎りましょうか？」

諦めて話題を変える。

節子はフライパンでバターを熱し、殻をむいただけのピーナツをそこへ投入した。バターとナツの油分が香ばしく焦げ、その匂いに鼻孔がふくらむ。

「でも真面目な話、もし伊助を元気づけたいんあらさ、あんたがヤル気なくしてる場合じゃないんじゃないん？」

背中越しに香奈の声が届く。少しろれつが怪しい。物音が聞こえていたのはどうやら焼酎を取りに立っていたらしい。どうせ割るのを面倒臭がって、ストレートで飲んでいるに違いなかった。

「そうは言っても」

この無気力感は経験してみないと、その厄介さが解らない。表面的には支障がないのだ。日常生活もこなせるし、こうして受け答えもできる。しかしその裏で少しずつ拮がり、ある時点で突然、すべてをダメにする。

「そうもこうも言わない。まずは、そう。みんなに色々質問してみらいじゃない？」

そうすれば、お互いに理解も深まるだろうし。だいたい、そんな感情くらい意志の力でどうとでもなるんじゃないの？　生きるか死ぬかで戦ってきたんでしょ！　だったらまだまだ生きたり死んだりしなきゃ！」

あまりにも横暴な言い分だったが腹は立たない。思わず苦笑してしまう。忘れていたわけではないが、確かにもっと苦しい目には遭ってきたのだ。

「じゃあ、どうしてあの二人の仲が悪いのか教えてくださいませんか」

節子はフライパンからピーナツを一粒つまみ出すと、口に入れる。生き物を連想させる歯ごたえ。芯の方がまだ生なのだ。

「それ、実は知らない。でも面白いことは知ってる」

「なんですか？　面白いことって」

「忠晴さんてさ、私が子供のころから年寄りなんだよね。おばあちゃんの話だと、おばあちゃんが子供のころにはもう年寄りだったって言うし、戦前のここを撮った写真にも写ってたらしいよ」

お達者なんですね、という言葉を目前で飲み潰して節子は疑わしげに尋ね返した。

「私だって噂は信じないよ。でも、私が子供のときに年寄りだったのは確かだって。そりゃあ子供からすれば五〇歳くらいでも年寄りに見えただろうけど、そのころ六〇歳とか七〇歳とかの人たちからも年長者扱いされてたみたいだし」

それが本当だとしても、どう意味づけたらいいのか解らない。それに、汽一郎との仲の悪さという話題からすればどうでもいいことだ。

忠晴が数世代前の組織を壊滅させた人物でもおかしくない、そう考えていたことを思い出す。それなら自分や伊助同様、忠晴が長命というのもありうる。

ただ、歴代の抵抗者がすべて改造人間だったというわけではない。日清・日露戦争当時にワ号組織を壊滅させた上山哲一郎という人物は生身の陸軍軍人だった。

その前の組織は江戸末期に存在し、当然ながら記録はほとんど残っていない。もし忠晴が抵抗者だとすれば、最も若く見積もっても江戸時代の生まれということになる。

「さすがにそれはないか」

節子は呟く。

「そうそう。そうやって形だけでも無気力じゃなさそうにしてれば、憂鬱なんてそうそう維持してらんないって。いい子ね、タイニィ・ラヴ」

香奈はテーブルを平手で強く叩いた。バンバンと音がして、手の平の方が痛そうだ。やはり酔っている。

「はい、どうぞ」

節子は皿に盛ったピーナッツをテーブルへ置き、イスに座った。

そのとき、どこからかまたか細いネコの鳴き声をした。微かだが、意外と近くから発せられているようにも聞こえる。

やがてその声を包むように、方々から猫の鳴き声が挙がった。不定和音のその響きは、ゆびぬき通りを緩慢に満たしていくようだった。

「ほら、あれ」

香奈が窓の方を向く。シャツから覗く細い首筋は朱い。

ついに噂が現実化したのか。とっさに節子は立ち上がり変身しようとして、背を向けた香奈に目をとめる。

「香奈さん、こっちを向いちゃダメですよ」

そう言いながら節子は眼鏡を外し、ためらうことなく服を脱ぎだす。

「なんで？」

「変身します。人に見られるのは、その」

「わかった」

節子が服を脱ぎ終え変身しようとしたところで、急に猫の声は弱まり、消えていった。時間にして一分あるかないかだ。

「消えた」

香奈はつぶやく。

「ええ」

決まりの悪さを感じながら節子は脱いだばかりの服を身につけ、眼鏡をかけた。

「もう、振り向いてもいいですよ。すみません」

節子の言葉に、香奈は振り返った。

「どうするの？ あれ」まるで節子の責任でもあるかのように、香奈は尋ねる。「噂は一つに集約してから現実化するんじゃないか？」

節子は動揺してしまった。どう答えればいいのか解らない。下手なことは言えないが、黙っているわけにもいかない。

「の、はずなんですけど。いやでも、今のもやっぱり現実化には至らなかったみたいです」

自然と声が小さくなってしまふ。香奈は真っ直ぐに節子を見つめている。それが余計に節子を焦らせた。何も言えない。

「はず、じゃ困るんだけど。みたい、とかさあ。あのね、犠牲者が出るのは嫌なの。打つ手が無いのかもしれないけどさ、それでも対抗策とかちゃんと考えてるわけ？」

喋りながら香奈の顔は薄く赤みがかってくる。

「すみません。考えてはみたんですが」

「どんな？」

節子は答えられない。香奈は思い切りテーブルを叩いた。

「なに？ 適当なこと言ったの？」

沈黙が幾重にも折り重なり二人のあいだに堆積する。香奈は溜息をついた。

「今日はもう帰るから」

香奈が玄関を出てドアが閉まるまで、節子はひたすら体を縮こまらせ、座っていることしかできなかった。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>